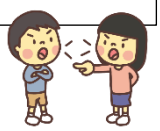
教育相談だより

令和７年１月１５日発行
福島県特別支援教育センター
作成：教育相談係



「言葉の力」「言葉を適切に遣う力」を考える

教育相談では、子どもの暴言に悩む保護者の方や先生方の話を聞く機会が複数あります。言葉には、相手を励ます、癒やす、傷つけるなど･･･強い「力」があります。だからこそ、家庭でも学校でも子どもに言葉の意味や、人とかかわる上で使うことが望ましい（望ましくない）言葉の遣い方を日々指導していると思います。

今回は、子どもの暴言を「言葉を遣う能力」という面から捉え、考えてみます。子どもの「暴言」には、子どもにとってどのような意味や役割があるか、場面例を基に一緒に考えてみましょう。

〈子どもの状態〉

〇言葉に触れる機会、言葉を遣う経験が少ない。

〇語彙数が少ない。
アニメやゲームで見聞きした言葉を意味理解が不十分なまま使うことも多い。

〇気持ちの調整がうまくいかないこと、気持ちをちょうど良い言葉で表現できないことがあり、それに対してイライラすることがある。

☆伝えたいのは「イライラした気持ち」であり、使った言葉の意味ではない場合がある。

例）子どもが暴言を吐き、大人が叱責した場面

〈大人の状態〉

〇言葉に触れる機会、言葉を遣う経験が多い。

〇語彙数が多い。
自分の気持ちを表す言葉を、複数の選択肢から選ぶことができる。

〇気持ちの調整がある程度でき、遣う言葉の「適・不適」を判断する。

〇言葉の意味を概ね理解し、言葉が示す状況やそれに伴う感情を想像することができるため「言葉」を重く受け止める。

☆「言葉」そのものを重く受け止める。

もしかしたらその「暴言」、本来の言葉の意味と子どもの思いは違うかも･･･

子どもの発達段階や言葉を遣う力を考慮すると、
「暴言で伝えようとしていた思い」や
「暴言を吐かざるを得ない状況」が
見えてきます。

「言葉の意味を自分と同じように捉えていないかもしれない」
「イライラした気持ちを表現する言葉が、他に見つからないのかもしれない」

「暴言を吐く」という一つの姿も、子どもの状態によって対応するべき課題は変わります。言葉そのものだけを捉えて対応するには、その言葉には不確かさが伴うことも多いです。上図では「暴言はよくない！使わない！」という叱責に留まるのではなく、「言葉の意味」や「イライラした気持ちの表現の仕方」を伝える必要があるかもしれません。

子どもは日々のコミュニケーションを通じて「言葉を適切に遣う力」を学びます。私たち大人が子どもの状態に目を向け、適切にかかわることで、毎日がこれからの対人関係や自分自身との対話を支える「言葉」を学ぶ、大切な機会になるのではないでしょうか。